

# 中学生におけるレジリエンスと学校適応感・ライフイベントとの関係

専攻	人間発達教育
コース	教育コミュニケーション
学籍番号	M15008K
氏名	高山美畝

## 問題の所在と本研究の目的

中学生の時期にあたる思春期には、友人関係、学業、部活動、親子関係等々、生徒たちが遭遇する可能性のあるストレス状況は多数存在する(石毛、2010)。その中でどう適応していくかということを考え、その資源となるレジリエンスに注目する。本研究では、レジリエンスを心理特性ととらえ、困難や脅威をもたらす出来事からの回復に影響を及ぼす要因とし、研究する。

中学生のレジリエンスの構成要因を明らかにし、それが学校適応感にどう関係しているのかみることによって中学生の持つレジリエンスの特徴を明らかにする。また、どのようなライフイベントが中学生のレジリエンスに影響を与えているのかを確認し、レジリエンスを向上させるプログラムに対する視座を示すことを目的とする。

## 調査

### 1. 調査協力者

兵庫県のA市の中学校2校の2年生338名に対して調査を実施し、うち回答を得たもので回答に不備のなかった318名。有効回答率は94.1%。

### 2. 調査時期：2016年9月。

### 3. 調査内容

1) フェイスシート：学校名、学級、出席番号、性別、年齢

### 2) 二次元レジリエンス要因尺度

平野(2010)によって作成された尺度で、「資質的レジリエンス要因(4因子)」と「獲得的レジリエンス要因(3因子)」から成る尺度。21項目に対し、5件法で回答を求めた。

### 3) 生活満足度尺度(日本語版SLSS尺度)

この2~3週間の生活について、どのように思っていたか。6項目に対し、6件法で回答を求めた。

### 4) 6領域学校適応感尺度(アセス)

「生活満足感」「学習適応感」「対人的適応感(教師サポート、友人サポート、向社会的スキル、非侵害的關係)」の3観点から学校適応感をとらえる。34項目に対し、5件法で回答を求めた。

### 5) ポジティブライフイベント尺度

学校に関するもの10項目を抽出し、各項目に対して、①経験があったかどうかについて、3件法で、②経験があった場合、その時の気持ちがどの程度うれしいものであったのか、4件法で回答を求めた。

### 6) ネガティブライフイベント尺度

学校に関するもの10項目を抽出し、各項目に対して、①経験があったかどうかについて、3件法で、②経験があった場合、その時の気持ちがどの程度つらいものであったか、4件法で回答を求めた。

## 結果と考察

### 1. 二次元レジリエンス要因尺度の因子分析

探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行ったところ、本研究における「資質的要因」は、「社交性」「行動力」「楽観性」「統御力」の4因子、「獲得的要因」は「問題解決志向」「他者心理の理解」の2因子ということになった。

平野(2010)における獲得的要因の「自己理解」

は抽出されなかった。他の尺度と比較すると、高校生までの尺度において「自己理解」の抽出がまちまちであるのに対し、大学生の尺度においては比較的多く抽出されている。このことから「自己理解」は、いずれ独立した因子として抽出されるようになるのではないかと予想される。

また、「楽観性」と「統御力」の得点が高かったことから、この2つは中学生がもちやすい心理特性であることが示唆された。

## 2. レジリエンスと学校適応感の関係

レジリエンスの下位因子と学校適応感の下位因子はほぼ全てにおいて、有意な相関がみられ、両者が関係していた。そこで、レジリエンスがどの程度学校適応感に影響しているかということを見るために重回帰分析を行った。その結果、特に強い影響を受けていたのは、向社会的スキルであり、これに対しては、「問題解決志向」「社交性」「行動力」からの強い正の関連がみられた。前向きな姿勢や態度、他者との交流を好み、積極的に他者とコミュニケーションをとる者は、友人との良好な関係づくりができるスキルが得られるということが示唆された。

## 3. レジリエンスとライフイベント（頻度、認知）との関係

ポジティブライフイベントの頻度については、多くの項目において有意な正の関連がみられたことから、「獲得的要因」だけではなく「資質的要因」も高められることが示唆された。ネガティブライフイベントの頻度については、「みんなができる問題ができなかった」という項目からはレジリエンスの全てに対して有意な負の関連がみられたことから、中学生にとっては他者と比較して自分の評価が低くなるような経験頻度が多いとレジリエンスが低下することが明らかになった。ライフイベントにおける認知についての関連はあまり見られなかったが、「他者心理の理解」に対

して「友人から悪口を言われたり仲間外れにされた」という項目から高い負の関連がみられた。友人から疎外されることに対して辛いと感じることは、レジリエンスを低下させることが示唆され、学校適応感にも影響することが予想される。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究で用いた心理特性としてのレジリエンスの尺度項目は、効力感に支えられた前向きな内容のもののみであった。その結果、消極的な性質をもつレジリエンス特性を扱うことができなかった。本研究ではネガティブな出来事避けることでレジリエンスが維持されるという予想外の結果が得られたが、それらもこの点に関連すると思われる。だがここから、改めてレジリエンスの概念を再考した。その結果、尺度における項目内容を再考することで、真にレジリエンス過程において影響を及ぼす、新たな知見や心理特性が見えてくるのではないかと考えられた。

また、本研究では、一時点での調査であり、プロセスについては考慮していなかったことや学校において予想されるライフイベントのみの検討であったため、レジリエンスの向上プログラムの視座を示すまでには至らなかった。学校外でのライフイベントについても検討することで、レジリエンスに影響を及ぼす様々なライフイベントが明らかになり、レジリエンス向上のためのより効果的な取り組みが示唆されるのではないかと考える。

さらに、今後、現場での実践を通して新しい知見や観点が得られることも期待される。その中で、中学生のレジリエンス過程を支えるプログラムを考えていきたい。

主任指導教員 中間玲子  
指導教員 中間玲子